

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

1. 活動のテーマ

<テーマ>

季節を通して自然（里山やビオトープ）の豊かさを探求、観察する。

<テーマの設定理由>

「校地の自然」は子どもたちが日常の園外保育時に触れる身近なものであり、日頃から昆虫やビオトープの水生生物や草木に興味を持っている姿が見られることから、「校地の自然」を通して子供たちの「自然の豊かさ」に関する興味・関心をさらに深めるため。

2. 活動スケジュール

大まかな活動スケジュールを記載するが、子どもたちの仲間同士の主体性・関心を重視し、活動の取り組みの順序はまちまちになることがある。

- 1) 6月：主に、ビオトープの水生生物の観察・探求
- 2) 7～9月：主に、昆虫採取、
- 3) 10～1月：主に、果樹の実の採取、野草の採集など
- 4) 2～3月：主に、ビオトープの観察、木々の芽の観察

3. 探究活動の実践

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

神学校の校地の里山の自然を活動の舞台としている。人工的な環境設定はない。

（活動中の子供の姿・声等）

- 1) ビオトープの中でガマガエルの発見、観察：
「カエルを見つけた・・・」「大きいよ、大きいよ！！」
「捕まえよう」、「もう少しだ」
- 2) 春のホトケノザの採取・試食：

暖かさを感じるに日々が続いています。子どもたちはホトケノザを探して、見つけると食べ始めました。「甘まーい」、「いっぱいとれたよ」

3) カブトムシの幼虫発見

グラウンドから保育棟に向かう小道の坂道に子どもたちはカブトムシの幼虫を発見。

子どもたちは大声を上げて喜びいっぱいの様子。

「みつけたぞ1!!」「カブトムシの幼虫だ、いっぱいいるよ・・・」

4) 秋の植物で冠

いろいろな葉っぱと秋の花で冠を作る子どもたち。

イモつるが花飾りの輪っかになることを発見。

「見てみて、きれいにできたでしょう」

5) 氷の魅力の発見、観察：

水槽の氷を発見、その氷を取ってその厚みに驚く子供たち。また、氷越しにみる世界が不思議な姿となる面白さを発見。地面に置くと塊が溶けて水になってゆく不思議さを発見。「氷を通して見るとぼやけて見える!!」「氷って、固くない。水になっちゃった。!!」

(子供同士や教諭との関わり)

1) ビオトープの中でヒキガエル(?)の発見：

神学校を訪れる度に楽しんだビオトープのオタマジャクシの観察、ずーと見守ってきたおたまじゃくしの成長、カエルになって巣立って行きました。保育者がビオトープの観察を促すと、時には親ガエルを発見、子どもたちは驚きと大喜びの声を上げます。何とか捕まえようと小枝を網代わりに捕まえようと真剣です。

2) 春のホトケノザの採取・試食：

子どもたちは、保育者から教えられてホトケノザという野草を食べることができることを発見。みんなで集め始めました。

嬉しい発見をした時の表情が忘れられません。甘くて美味しい春の味を楽しみました。

3) カブトムシの幼虫発見：

グラウンドから保育棟に向かう坂の小道に、男の子どもたちはカブトムシの幼虫を発見。

「まだ赤ちゃんだからね」と保育者の声にそっと元の土の中に戻す子どもたち。昆虫に対する優しさを感じました。

4) 秋の野花で冠

子どもたちは自然の中で発見する素材で、冠を作って楽しんでいました。

保育者が指示をしなくとも、子どもたちはイモズルや秋の野花を集め、個性的な冠を作りました。

5) 氷の魅力の発見、観察：

冬の寒い天気の良い日に、子どもたちは氷が張っている水槽を発見。保護者とその氷を取り出し子どもたちに渡すと、その厚みに驚いているようす。氷越しに見る世界は不思議な模様がかかり、氷の面白さを発見。また、地面に置くと塊が水になってしまう、氷の不思議さを発見した様子。

(写真)

1) ビオトープの中でヒキガエル(?)の発見



2) 春のホトケノザの採取・試食：



3) カブトムシの幼虫発見：



4) 秋の野花で冠



5) 氷の魅力の発見、観察





4. 振り返り

カエルの生捕り、野の花々、冬の氷、ツララを観察、手に触れるなど、子どもの主体性を重視し、中心的な子どもが仲間を集めて自主的なグループを作り活動を展開している。教諭はできる限り、関与しないで質問などには答えている。子どもたちの観察力・探究心の旺盛なことに改めて気づかされた。